山﨑区長 新春対談

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会スポーツディレクター

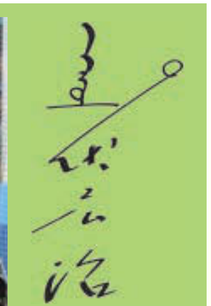
室伏広治さんを迎えて

▲2009年から毎年続けている、前国立競技場の聖火台をこどもたちと磨くプロジェクトにて

▲2016年リオ五輪のジャパン・ハウス内覧会で、スポーツディレクターとして日本をPR

▲東京2020大会を来年に控えて、大会までの取り組みなどをテーマに対談（左は司会の佐藤委子さん）

室伏（むろふし）　広治（こうじ）さん



▲直筆のサイン

1974年静岡県生まれ。陸上競技ハンマー投げの選手として、高校時代から数々の記録を更新し、学生記録やジュニア日本記録を打ち立てるなど早くから日本の投てき界をリードしてきた。2004年アテネオリンピックでは、日本人の投てき選手として初めて金メダルに輝き、2012年ロンドンオリンピックでは銅メダルを獲得。また、世界陸上では2001年に銀メダル、2011年には金メダルを獲得するなど、日本の陸上競技界を背負い、数多くの快挙を成し遂げてきた。

現在、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のスポーツディレクターに就任し、アスリートの視点や意見が大会・競技運営全般にわたって反映された「アスリートファーストの大会」の実現に向けて活躍中。

父の影響で始めたハンマー投げ

司会　本日は陸上競技ハンマー投げのオリンピック金メダリストであり、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のスポーツディレクターを務めていらっしゃる室伏広治さんをお招きしました。よろしくお願いいたします。

室伏　広治（以下室伏）　よろしくお願いいたします。

司会　室伏さんは日本記録を何度も更新し、数々の世界大会で優勝を果たすなど世界のトップレベルで活躍されてきましたが、陸上競技を始めたきっかけはどのようなものだったのでしょうか？

室伏　私がハンマー投げ競技を始めたきっかけは、父がオリンピック選手で、また私の前の日本記録を持っていた選手なので、父に憧れてハンマー投げを始めました。

区長　室伏さんのお父さんもすごい人で、「アジアの鉄人」と言われて、ずっとオリンピックに出場した選手でした。その後、息子の広治さんがハンマー投げの選手になり、アテネで金メダルですか。そのがんばり、根性、努力、これをお父さんから引き継ぎ、すごい選手になったなあと思います。

司会　今日はメダルもお持ちいただきました。

区長　すごいですね。

室伏　小さい方がアテネオリンピックの金メダル、そして大きい方が世界陸上、大邱（テグ）で行われた時の金メダルです。

▲獲得したメダルを紹介

区長　オリンピックの方が小さいのですか？

室伏　最近、大きいメダルが流（ながれ）行りの傾向で、ちょうど2011年（世界陸上大邱大会）のころからメダルが大きくなってきました。オリンピックでは、私はロンドンの銅メダルも持っているのですが、一回り大きいです。東京はどんなデザインになるか楽しみにしてください。

司会　いよいよ来年、東京で開催される、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会に関する思いやお考えは？

室伏　東京で開催されることは、アスリートとしても喜びですし、きっと日本選手ががんばってくれると思います。また、どの世代も楽しめる、そんなオリンピック・パラリンピックを目指すべきかなと思います。私も9歳のころに生でロサンゼルスオリンピックを見ましたが、いまだにあのときのことは忘れられません。きっと江東区のこどもたちもチャンスがたくさんあると思いますので、次世代に夢がある大会に、一緒に携わっていきたいなと思います。

区長　当初、2016年開催を目指しましたが、結果は、敗れてしまいました。今度は2020年を目指し、開催が決まったときは感激していたのに、もう来年ですね。準備は組織委員会が一生懸命やってくれていると思いますが、区も、みんな一生懸命盛り上げて、終わってから、良かったねと言われるような大会にしたいです。また、大会のレガシーをどうやって残していくか、それが我々のこれからの責任でもあります。

こどもたちと取り組む聖火台磨き

区長　ところでこの写真（3面写真①）は聖火台のようですが、何の写真ですか。

室伏　これは前の国立競技場に設置してあった聖火台で、今は、東日本大震災で被災した東北の復興の象徴として、宮城県石巻市に設置されています。私は2009年から毎年、地元のこどもたちと、この聖火台を磨く活動をしています。このきっかけとなる話がありまして、聖火台の製作者は鈴木萬之助さんという方で、1964年の東京大会に向けて製作をしていました。ところが、国家的なプロジェクトというプレッシャーもあってか、作成中に失敗してしまいます。萬之助さんは職人としてはありえない失敗と思い、ショックで寝込み、亡くなってしまいました。これでは東京大会に間に合わないと、息子の鈴木文吾さんが引き継いで作り上げたのが、この聖火台です。そして、文吾さんは東京大会が終わってから亡くなる2008年まで、毎年家族で磨き続けていました。それをスポーツ関係者は誰も知らず、たまたま私が聞きまして、2009年から引き継いで、こどもたちと一緒に聖火台を磨き、点火してみるプロジェクトを立ち上げました。聖火台を見たことも触ったこともないこどもたちは、磨いてみるとなんか気持ちいいねと言ってくれたりします。また、復興支援ということもあり、少しでも東京大会に馴染みのある物が東北にあると、オリンピック・パラリンピックが身近にあると感じてもらえます。

▲2011年世界陸上の競技の模様

区長　私はこの話を初めて聞きました。それも前回の東京大会のひとつの心のレガシーですね。

アスリートファーストで万全に臨める大会に

司会　室伏さんは大会組織委員会でスポーツディレクターを務めていらっしゃいますが、その抱負をお聞かせ願えますか？

室伏　スポーツを中心に活動させていただいていますが、世界各国からアスリートが来て、万全な状態で競技に臨んでいただきたいなと思い、そういう気持ちで取り組んでいきたいです。

司会　「アスリートファースト」という考え方については？

室伏　競技場の中で競技をするのはアスリートです。彼らの意見を充分に反映させて、選手村やそこからの移動など、できるだけストレスがなく、東京に来ても、それぞれ自分の家にいるようにリラックスできて、競技をするときには真剣にできるように、そういう環境作りが大切かなと思います。

区長　完全にベストの状態で試合ができる、そういう環境をプレゼントすることが、室伏さんの大きな仕事なんでしょうね。前回の東京大会のとき、私は、選手村の食堂でボランティアをしました。そのときに何を感じたかというと、試合前の選手の顔つきと、試合が終わった後では全く違ってしまうんですよね。そういう姿を身近で見ると、スポーツの厳しさをものすごく感じましたね。室伏さんが選手としての経験を生かして、世界中から来る選手のために、いろいろ配慮してくださるんでしょうね。

▲2011年世界陸上では金メダルに

負けても、それをバネにすることが大事

司会　室伏さんはスポーツや運動を科学的に研究されていますが、室伏さんにとって、スポーツが人々に与える力とはどのようにお考えですか？

室伏　スポーツはいつもいい時ばかりではありません。自分は、世界陸上とオリンピックで合わせて15回代表になって、5回はメダルを取っているのですが、それ以外はメダルを取っていませんし、予選落ちもしています。全く出場ができなかった大会も多々あります。やはり、うまくいかなかった10回があるからこそ、5回のメダルにつながっている。そういう意味では、どのアスリートも、負けた時は残念な状況かもしれませんが、また次のバネにして、がんばっていくという気持ちが大事ですね。スポーツというのは、自分が思うようにはいかないこともあるけれど、それを努力と研究によって、乗り越えてやっていくことが、一つの人生の教訓になるんじゃないかなというふうに思います。

区民とともに大会を盛り上げる

司会　東京2020大会に向けて江東区の取り組みを教えていただけますか？

区長　例えば、江東区は川が多いのでカヌー大会をしたり、パラリンピックの競技の体験をしたり、いろんなスポーツのイベントを開催して、多くの人にスポーツに関心を持ってもらう、そして東京2020大会の時は、みんなでお手伝いをしたい、盛り上げたい、そういうふうにしていきたいです。

司会　区独自のボランティアの募集も行うようですが。

区長　東京都や組織委員会がボランティアを募集していますが、江東区の場合には、競技会場が区にたくさんあるので、自分の家から通えます。なので、もっと緩やかに、みんなが参加しやすいようにしたいです。

室伏　アスリートも応援やボランティアなどたくさんの人に支えられて、初めて競技が成り立つわけですから、本当にありがたいことです。特に、海外に行っても日本のおもてなしとか、迎え方というのは、評判もいいです。ぜひ、区民の皆さんとともに成功に向けてがんばっていきたいですね。

区長　江東区でも練習会場を提供することになっています。セキュリティの問題など、いろいろと制約も多いかもしれませんが、できれば、小・中学生が一流選手の近くで練習が見られるとか、例えばバレーボールでは練習するときに、ボール拾いが必要になる。そのとき、中学のバレーボール部にお手伝いをさせるとか、お互いふれあい、協力しあえることができればと思います。

室伏　せっかくアスリートが来るのであれば、交流があると、忘れられない思い出になります。あとは時期であったり、ルール上のところでクリアできればいいかなと思いますよね。

区長　試合が終わって休憩時間に、小学生の金管バンドやマーチングバンドなど、パフォーマンスを披露することができれば、こどもたちは一生忘れません。できるだけそんなチャンスを作りたいです。ぜひ、「アスリートファースト」の次に、「こどもファースト」も考えていただけるといいですね。

こどもたちの記憶に残る取り組みを

司会　区では「部活動☆夢応援プロジェクト」など、各中学校で授業を行っていますね。

区長　そうですね。部活にオリンピアンの選手とか、それぞれの学校で希望する部活に一流選手をお招きし、直接指導してもらう。こどもたちはそれだけでも目が輝いて、きっと成長するんじゃないかなと思います。

室伏　成長しますね。

区長　あとは江東区内で東京アクアティクスセンター、有明アリーナ、有明体操競技場を工事していますが、小学生がその競技会場の工事現場を見学する事業を全校で実施しています。こどもたちは東京2020大会の時に競技が見られないかもしれないので、僕たちはこの建物を作っているところを見たんだという思い出、せめてそういうのを残してあげたいと思っています。

室伏　素晴らしいことですね。記憶にずっと残るんじゃないでしょうか。

司会　最後に室伏さんから、今年の抱負をお聞かせください。

室伏　いよいよ来年、東京2020大会という時期がやってきました。今年はテストイベントや大会の準備の面でも忙しくなってきます。そして、大会前年なのでもっともっと盛り上がってくるんじゃないかと思います。ぜひ大会の成功に向けて、区民の皆さんとともに、がんばっていきたいと思います。

司会　室伏広治さんありがとうございました。

室伏　ありがとうございました。

▲対談後、区内の競技会場の地図を見る室伏さん

①Photo by Tokyo 2020/Uta MUKUO　②③④写真：フォート・キシモト